大富豪のチカラ

中津川水系・魚野川（2020/9/18-21）

Ｎ山、Ｉ崎、Ａ原、Ｓ口、Ｈ口

最近の天気予報はよく転がる。４連休を前日から休んで八久和川へ行く計画であったが、数日前から雨続きの予報へ変わってしまった。会への計画書を出すリミットの水曜まで待ってみたが、やはり雨の予報は変わることがなかった。中部、北陸、東北と全体雨マークが並ぶ中で、唯一曇りのマークが１日だけ出ていたのが新潟だった。それに賭け、今回は魚野川へ転進することに決めたのだ。

ところが出発前日になると予報がガラリと変わってきた。新潟が悪くなり、八久和川のある山形の方が天気が良くなってきたのである。何を今さら、もう計画を変えるわけには行かない。

７時に練馬駅に集合し、中継地点の昭和ICでメンバーが揃うと湯沢ICへ向かった。ここらの空は明るいが西側は厚い雲に覆われている。あっちの方面に行くんだよなぁと溜息が漏れる。

湯沢から秘境・秋山郷を抜け山道が終わった所が出発地点の切明温泉である。駐車スペースには平日にもかかわらず、しかも雨予報だというのに車が１台停めてあった。僕ら以外にも物好きはいるものだ。練馬ナンバーだが「長野在住です」と張り紙がしてあった。これもコロナ禍の副産物である。

１２：０５、ゲートの脇を通り登山道を歩き出す。Ａねーさんの足が速くみんなとの距離が開いていく。しかし急に足が止まって振り返ると
「クマ！」と叫んだ。

それは見るには可愛らしい子熊であった。斜面から登山道を横切ってゆっくり川の方へ歩いて行った。母熊がいるとまずいのでしばらく立ち止まって周りを見回した。もういいだろうと判断してからＡねーさんは笛を鳴らして歩き出した。

吊り橋を渡るとそこから標高差２００ｍのつづら折りの急な上りとなる。落ち葉のつもった急な上りを短いターンを何度も何度も繰り返して上って行く。何だか古に遠路を旅した歌人のような気持ちになってきた。
“落ち葉みち　何度折れるか　つづら折り　着いたる先に　イワナ夢みて”
（幾重にも積み重なった落ち葉の上を、いったい何度折り返して上って行くことよ。それもひとえにイワナに会いたいからなのだなぁ。）

きつい上りに加えて降り出しそうだった空からついに雨が落ち出した。幸いつづら路は木々に覆われているためわざわざレインウェアを出すまでには至らなかったが。上り切った所にはご褒美のようにベンチがあった。迷わずここで一休みする。

ここからは水平の歩道が２時間続く。その昔発電所建設のためにここにトロッコ線が敷かれていたそうだ。

１５分ほど歩いた所にダムの放流を報せる巨大なサイレンが設置されていた。雨はなんとなく納まってくれているのだが、歩道より少し上のレベルの所で厚い雲がプレッシャーを与えるように停滞している。

渋沢ダムに着くまでに３つのトンネルがあるそうだ。２つ越えて３つ目が出てきたが、３つ目は閉鎖されていた。脇に急な巻き道がありそこを上って行くのだが、しばらく水平道を歩いて来たのでこの急な上りは計算外に思えた。
するとまたトンネルが現れた。そうか先ほどのは数に入ってなかったんだな。最後のトンネルは長くて真っ暗なのでヘッデンを点けて進む必要があった。他のトンネルより天井が低く、屈んでもザックの天蓋が擦れる所があった。
行く手に渋沢ダムが現われ、右岸への橋を渡って１４：５５、無人小屋に到着した。ちょうどその時だ、雨がまた降り出したのは。おぉ、この強運は誰のおかげだろう。

小屋は玄関を含めて四畳半ほどの大きさである。幸い他に利用者はいなかった。
銀マットを広げベースを整えると、まずはビールを冷やそうとＩ崎さんがみんなからビールを集め小鍋に入れて外に出た。その時だ、「あーっ！」と赤い色の缶が２本鍋からこぼれ落ちるのが見えた。Ｉ崎さんの金麦と僕の本麒麟だった。下の岩角にちょっと当たっただけなのだが缶に小さな穴が開き中身が吹き出てきた。
「あっ、大変！」とグッチがテーピングテープを取り出し穴の所を巻いてくれたが、テープの布からじゅぶじゅぶと染み出て来る。しょうがない、たとえぬるくても命の水は失えない。缶を開けぬるい液体を流し込んだ。

夕飯はＡねーさんがサバカレーを作ってくれた。作っている最中に何がきっかけか鼻歌で「真夜中のギター」を歌い出した。おかげで、その後外に出てフィンガー５などの７０年代歌謡曲大会となる。怪しい天気よ、この歌で機嫌を直しておくんなせい。

床に入ってから２時間くらいして一旦目が覚めた。寒い、酒が切れたせいだろうか。重なったザックから服は取り出せないし、体を丸めて寒さを耐えた。

翌朝、雨は降っていなかったが湿った色の空の下、６時に出発した。吊り橋を渡ってすぐ、トラロープの残置された急な斜面を下りて千沢の河原へ下りる。広い川幅を何回も渡渉しながら進んで行くと二俣が現われ、右の魚野川へと入って行く。

淵の先が城門のように狭まった『桂カマチ』を抜けると『箱淵』。斜めに立ち上がったセメント色の岩壁を滑り落ちぬようにそろりそろりとへつって行く。そこを越えると白い水流を横切って対岸へ渡るのだが、ここで先週やったスクラム渡渉を使った。
左岸から『井戸沢』が入った所で１本目の休憩を入れた。

川幅がしぼられた先に右岸から沢が２ｍの滝となって落ちていた。『高沢出合』だ。xここを越えるのにＩ崎さんが左岸の水位より上をへつって越そうとしたが足場がなくなり引き返す。その間にグッチが白い水流の中に足場を見つけ下から越えて行った。８：３０、ここで荷物を下ろして休憩＆釣りタイムとした。

竿を伸ばしてまず高沢出合の釜へ毛鉤を打ってみた。何の反応も無かったので今度は滝の右側から上がり高沢を進んでみた。狭い流れであったが魚の居そうなポイントは点在している。毛鉤を打ちながら進んでみたが反応無し。あまり進んでも何だし、戻ってみるとＡねーさんが１尾釣り上げたと言う。しかもそれを僕がさっきあきらめた高沢出合の釜で釣ったそうだ。

一方、ゴンちゃんがこの先で釣り落としたと言っていたので僕も上流側へ進んでみた。しかしやはり反応無し。肩を下げ手ぶらで戻って行くとまたもＡねーさんが手にイワナを握っていた。
「えっ？もしかしてアタシってすごい？」

休憩を終えて再び歩き出す。高さを変えずに奥へと伸びていた川全体が突然小高く盛り上がって滝となっていた。『大ゼン（この辺りでは滝のことをゼンと言う）』だ。
流れの右側の岩壁を上がった。ここを越えてからは魚影が濃くなるそうなので楽しみである。
しかし隊列は竿を出さずに進み続ける。『大ゼン』を越えてから５０分ほどで『黒沢出合』。右岸の水際に立つ８ｍほどの『ナマリ岩』が面白い。
この辺りからテン場探しを始める。砂地の適地もあったが焚火をする場所がどうかなと言う話しになり先へ進むことにした。

もう今日はしゃかりきになって進む必要もないのでこの辺りから竿を出しながら進ませてもらった。それまで竿を出したいポイントをスルーして進むのはちょっと辛かったのだ。
そしてようやく僕の毛鉤に魚が喰らい付いた。気持ち良い手応えを感じながら河原へ上げる。側面の朱点や腹から尾びれにかけての淡い朱色が美しいイワナだった。
落ち込みで２尾目が掛かった。さっきより大きい２６ｃｍ。まじまじ見てもここのイワナはきれいだなぁ。

行く手に深い淵が立ちはだかる。さて、どう行くか。ゴンちゃんは迷わず泳ぎ出す。泳ぎかぁ？水は冷たい。
２番手のＩ崎さんは腰まで浸かりながら右岸沿いを行き、立ち上がった岩場に取り付いた。そちらには残置されたロープが垂らされてあったのだ。上がる途中、ザックが木に掛かりなかなか上がれないが体のやわらかさを利用して何とか上がり切った。
残りの三人は濡れたくなかったので右岸に近づいて行くと、
「待って。木に引っかかるからザックだけロープで上げる」とＩ崎さんが声を上げた。ゴンちゃんも上に回って来て二人でザックを引っ張り上げてくれ、空身で岩場を上らせてもらった。

１２：１５、またもやもっこりした丘のような滝が現れた。川幅全体にスダレ状になって落ちている。『カギトリゼン』である。右岸の水流脇をゴンちゃんがたわしを使いながら慎重に上がって行った。そしてロープを出し順番に上がって行く。途中で生かし魚篭を先に引っ張り上げてもらったが、さしずめそれはイワナのエレベーターみたいだった。

そのまま進むうち１２：５０、次の滝である『イワスゲゼン』まで来てしまった。これも川幅全体にスダレ状に落ちているが途中に瘤のような岩が突き出していて滝に表情がある。
それにしても今日はここまで来るつもりではなかったので
「どうする？戻って（テン場に）良さそうな所探してみます？」

いったん戻りながらテン場適地を探してみたが、下が湿っていたりしてここぞと言う所が見つけられず、また『イワスゲゼン』まで戻って来てしまった。
「ここいら辺にこだわる必要もないし、これを越えて行ってみましょうか」とゴンちゃんが決断を下した。

左岸の巻き路にトラロープが垂らしてあったがロープの末端にたどり着くまでがドロドロした足場だったために巻き路はやめた。流れの右側が上がれそうだったので、ゴンちゃんが再びたわしを取り出して使いながら上がって行った。
『イワスゲゼン』の上はナメとなっていて、すぐ先には『スリバチゼン』が見えた。向かって右 1/3 の所が折れていてＶ字のように落ちている。
続いて小振りの『ヘリトリゼン』。今日はゼンシリーズのオンパレードである。

１４：１０、『奥ゼン沢出合』の右岸にテン場適地を見つけた。もうこれ以上のテン場はない。もうここに決まり。ザックを下ろして一休みした後、釣り班と生活班に分かれて行動開始となった。

ただしこの辺りから川幅が狭まる。今までのようなダイナミックな景観からいわゆる狭い沢という感じになり、小さな落ち込みを狙っての釣りとなる。
チビちゃんは掛かったがリリースサイズ。生かし魚篭にはＡねーさんの釣った２尾と僕の釣った２尾が入っていた。もう１尾欲しいなとは思っていたのだが、この先も同じような景観だし今日はもういいやと竿を納めて戻ることにした。
すると『奥ゼン沢』に入ったＡねーさんが１尾持って帰っていた。３対２で竿頭はＡねーさんとなった。

テン場では生活班のＩ崎さんとグッチが既に焚火を熾してくれていた。イワナに串を打ち焚火の前に置く。
「イワナが焼ける前にこれでもどう」とＩ崎さんがウインナーを取り出して配った。串に差し焚き火で炙って食べると香ばしさも加わってとても美味い。冷やしてくれていたビールとも相性が良い。
「ウインナーがさぁ、もう１本残ってるけどさぁ、これジャンケンで決めよう。」
最初はグー、ジャンケンポイ！…Ａねーさんがウインナーを獲得した。

さて、イワナも焼き枯れてきた。２２～２６ｃｍの大きさ。これもジャンケンで選ぶ順番を決めることになった。
最初はグー、ジャンケンポイ！…グーを出して一人敗退したのは僕であった。
ジャンケンポイ！ジャンケンポイ！…結果、勝ったのはまたＡねーさん。２６ｃｍがＡねーさんの手に渡って行った。
「アタシってさ、持ってるのかな。」

今晩の夕食当番はグッチ。作ってくれたのは“チャプチェ丼”。しかしこの“チャプチェ”、Ｉ崎さんはこの歳までその存在を知らなかったらしく
「ん？何それ？そんなの聞いたことないよ。知ってる？えっ、知ってんの？」
そして“チャプチェ”の名前がなかなか覚えられない。
「チャプタ。…チャプシ。…シャプショ。…まあまあ、いいじゃねぇかそんなもん。」

明日は『芝沢出合』のテン場を目指すので移動する時間は短い。そのため６時起きでゆっくり目の８時半出発と決めた。
昨晩寒かったので今日はフリースの上着を着て寝た。温かい。しかしまた酒が切れた頃、寒さで目が覚めた。今日も体を丸めて耐えることになった。

６時に起き出すが、３０分前からゴンちゃんが起き出し焚き火を熾してくれていた。
食当は僕。メニューはビーフンにした。干しエビを焼き、乾燥した麺を入れている最中に鍋がひっくり返り干しエビが地面に落ちてしまった。すると
「あぁ、あぁ、」と言いながらＡねーさんがせっせと箸でエビを拾い上げてくれた。
「こういうの得意だからさ。少しくらい砂が混じってもみんな文句言わなーい。」
Ａねーさんの地道な活躍で干しエビ入りのビーフンがみんなの口に運ばれた。

８時半の出発だが、釣りのために僕だけ３０分先行させてもらうことになった。と言っても昨日あきらめた狭い沢筋を先行するのだ。はしょりながら進んで行く。
ところが流れが左に折れると渓相が良くなった。落ち込みと溜りが組み合わさった狙いたいポイントが出てきたのだ。
手応えあり！なかなかいい型が上がった。美しいな。そしてまた当たりがあった。しかし喰いが浅かったようで泳がせている間に外れてしまった。
さらに進むと巨岩に囲まれた深い淵が現れた。毛鉤を打ったが表層では反応無し。こういう所では餌釣りのＡねーさんに竿を出してもらいたいなぁと思って振り返ると、なんと４人が少し離れた後ろからこっちを見ていた。もう３０分のアドバンテージが無くなってしまったか。

Ａねーさんにこの淵でやってみてと言ったら、竿を取り出し、期待通り１尾上げてくれた。さらには巨岩を上がって先へ行く。その先には広い釜があり竿を出していた。
「ねーさん貪欲だなぁ」とゴンちゃんが苦笑いをした。

広い釜は『小ゼン沢出合』で、右から５ｍの『燕ゼン』が三角形に注し込むように落ちている。滝の右の石垣のような岩壁を上がる。上がった所はナメになっていたが、その先からはまた狭い沢となり竿を納めた。

やがて沢床が黄色味を帯びたなめらかなナメ床となった。９：４５、『庄九郎沢出合』に着く。ナメの水際の平らな所にザックを下ろし休憩＆釣りタイムとなった。
ナメが左に折れると岩場となり凹型をした広いスダレ状の滝があった。上がった所で小物を釣り上げたがこれはリリース。また滝が現れ釜の落ち口に毛鉤を打ってみたが反応は無し。引き返そうとしたところに遡行してくる５人組の姿があった。

ワンダーフォーゲル部らしき学生達だった。そしてすぐ後に二人組もやって来た。今まで人っ気が無かったのが急ににぎやかな沢となってしまった。
戻ると既にＩ崎さんは彼らと話しをしていて二組とも『芝沢出合』のテン場を狙っているとのことだった。そんなに広いテン場ではないだろう。先行されてどうなるか。そこでＩ崎さんの力強い名言を聞くことになった。
「どうにもならない時にどうにかするのが銀座（山の会）だ。」

トップを走っていた僕らが、突然３番手となって遡行することになってしまった。おそらく彼らは昨日からだろうが、一日早く入渓したものの初日を無人小屋で過ごした僕らにはそんなにアドバンテージがあったわけではなく、十分こういう可能性は考えられた事である。

そして『庄九郎ゼン』に辿り着く。高さは１０ｍありゴツゴツした粗い岩肌を暴れながら落ちている。この川の中でも極めて危険度の高い所だ。取り付くとしたら左側の水流の少ない所だが、そこに目を向けるとさっきの二人組が取り付いていた。一人は上がり切ってロープを出し、もう一人が途中まで上がりながらその先の手掛かりに迷っているところであった。
彼らを見届け、僕らは迷わず左岸の巻き路を選ぶ。ズブズブぬかるんで上りにくかったが何せ安心できるルートだ。

高巻きを終えて進むと今度は『ゴウトウ』と名付けられた巨岩帯となる。ＧｏＴｏキャンペーンの始まりである。グッチが先頭を行き左岸の巨岩を探って行く。すると右岸にあの５人組が取り付いていた。そしていつの間にか彼らを追い越してしまった。一番後ろを行く僕に対して「こいつにだけは」的な視線を送って来るように感じた。いやいや僕らは敵ではないよ。彼らに話し掛けた。
「さっきの『庄九郎ゼン』はどう越したの？僕らは巻いたけど。」
彼らも巻き路を選んだそうだ。そして先頭の黒いウェアのリーダーが聞いてきた。
「やはり芝沢のテン場ですか？」
「当初の予定ではね」と答えると、黒いリーダーが少し下を向いた。

巨岩帯の途中でテン場候補を見つけた。そしてそこで一休み。その間に５人組は先へ進んで行った。
「あの一番後ろの子、かっわいいよね～」と女子たちは話していた。考えてみれば今回の男子たちの 1/3 ほどの年齢である。男子たちにとってもかっわいい歳である。
さて、テン場をここにするかと言う話しであったが、また「焚火のスペースがなぁ」、「もっといい所を探そう」となり、理想の地を求める開拓者のごとく、我々も西へと進路を取ることとした。

１２：３０、巨岩帯が終わる所でまたテン場候補地が見つかった。
「ここでいいかな。でもまあ他にもないか空身で探しに行こう。」
僕は別動隊で釣りをさせてもらうことになった。何人も通った後だけれど拾える所があれば竿を出してみたいと思ったのだ。しかし期待に外れこの先沢筋は狭くなり、進路に絡まないようなポイントはないようだ。３０分程で戻ることにした。

先ほど見つけた所が今日のテン場となった。２段から成り、上段にタープを張り、下段が焚火を囲む宴会場である。
「あーぁ、アタシもうビール無くなっちゃったんだぁ。」とＡねーさん。芋焼酎は残っているがビールは終わってしまったそうだ。確か昼間どこかで飲んでたもんなぁ。

その後、惨事が起きた。僕の座っている三角の岩の座りが悪かったので少しずらそうと手を掛けた時、裏側の角が立っていたらしく左手の小指が切れ鮮血が飛んだ。
「？！！！」
びっくりして指を押さえたが傷口が広く血が止まらない。
するとグッチがガーゼとテーピングテープを出してくれて、まず血を止めないとと指をぐるぐる巻きにしてくれた。指を高くして押さえ、血が止まるのを待った。指が脈打っているのが感じられた。ゴンちゃんも「こんなのもあるよ」とゴムの指サックを出してくれた。何ともありがたい。自分の装備では足りないものだらけだった。

指はズキズキしていた。こんなんじゃ今日は飲んじゃいけないのは明白だ。
「Aねーさん、良かったら僕のビール飲んで。」
「えっ、いいの？でもいいよ。落ち着いたら飲めば。」
「いや、でもまだ痛むし。」
「じゃあ、いっただっきまーす。でも欲しかったら言ってね。」

今日の分で残していた日本酒とウィスキーもみんなに飲んでもらった。まだ指を上げて押さえている僕を見てAねーさんが
「それってさぁ、イワナの呪いなんじゃない」と言った。
違うよ。イワナはそんなことしないよ。むしろAねーさんの強運がこんな形で僕からビールを貢がせようとイタズラしたんじゃないの？と僕の指が囁いた。

あるいはそれはトランプゲームの“大貧民”のようだ。力のあるものに富が集まり、力の弱いものは全てを捧げていく。ここにその縮図が具現化されたとは恐るべし。

「あれだね、今回はお酒に縁がなかったねぇ。１日目もビールに穴が開いちゃったしねぇ」とグッチが言った。
確かに。いや、しかし、今日は飲めないが明日は必ず飲むのだ。臥薪嘗胆なのだ。

イワナが４尾だったので今晩は香草焼きにすることになった。食当のAねーさんが器用に鯵の開きみたいに魚を開きフライパンで焼いてくれた。さらに今晩のメニューはちらし寿司と豚汁であった。豚肉を長持ちさせるために肉の１枚１枚に味噌を塗って持って来てくれたのだ。力作はとても美味しかった。

焚き火を前にＩ崎さんが手にコップを持ったまま首をうなだれて眠り込んでいた。宴の半ばでよく見る姿ではあるが。ふと目を覚まし
「ん！首位打者と三冠王は誰だった？」と寝ぼけて言った。野球の夢でも見てたのか。そしてその後
「指、大丈夫？」と言ってくれた。夢の中まで心配してくれてありがとうございます。

今夜は寝るにあたりレインウェアの下も履いてみた。ゴンちゃんがそうしていたかuffらだ。しかし今晩も寒かった。お酒も入っていなかったし僕の位置は一番沢側で沢筋を通る風が時々顔をなでて来る。今回はこの季節にしてはシュラフが薄かったようだ。ウトウトしながら寒さの中で朝を待った。ボーっと考えを巡らせてみる。テン場をどこにすればもっと釣りが出来たかなぁ。

５時起きで朝食を済ませタープを片付けて６：４５出発。今日のヤマ場は登山道に出るまでの藪漕ぎだ。
３０分ほど歩いた所にテン場を見つけた。
「これが『芝沢出合』のテン場だな。でも『芝沢』ってわからなかったな。」
４ｍの滝を越えると沢はコンパクトになった。１０時、『南沢出合』。ここにもテン場があったが大きくはなかった。次の二俣を右に入るといよいよ藪漕ぎがもうすぐ。
１０：２０、両岸に生えている笹藪が突然壁となり前方を覆ってしまった。いよいよ藪漕ぎ開始だ。
「アタシは去年経験してるからいいので、はい、みなさん頑張って」とＡねーさんは一番後ろに回った。

最強のラッセラーであるＩ崎さんが先頭で藪を漕ぎ始める。この笹は１ｃｍほどの太さで固くハリがある。背中とザックの間に入り込んだり、前の人が離したのがバネとなって撥ねてきたり、足元も滑りやすいし、とんでもないやつらである。
「ウー…」とゴンちゃんでさえうめき声を上げる。すると
「フフッ…、楽しい」とＡねーさんが不敵な笑いを漏らした。

交代しながらと思っていたがＩ崎さんは代わらずに藪を漕ぐ。そして
「道はどこだ～。おミチ～、おミチ～」と言いながら藪を漕ぐ、漕ぐ、漕ぐ。
そしてついに「出た～！！」
２０分の格闘であった。それは細い登山道であったが、とても平和なありがたい登山道に思えた。

青空が見えていたが高い所まで来ると霧で下方の視界が無かった。すると
「霧が～峰～♪」と有名なＣＭをＩ崎さんが歌い出した。とても大きないい声で。
それがグッチと僕のツボにはまり大笑い。藪漕ぎで疲れた心のカタルシスとなった。

『金石の頭』からＡねーさんが電話を架けタクシーの手配をしてくれた。ここから高天原スキー場へと下りて行く。雪の無いスキー場は歩きにくい。林間コースはいいけれど、中級斜面はジグザグしながらでないと下れない。
リフトに沿って下りて行くと、霧の向こう、下方にうっすらと麓のホテルが見えて来た。あそこか。まだ下りは長い。
１２：３５、ゴ～ル！荷物を道路に散らかすように下ろし、後は迎えのタクシーを待つだけだ。
だら～っとしていると昨日の二人組が下りて来た。僕らより先に出ていたはずだが。聞いてみると『北沢』を最後まで詰めて藪漕ぎを１時間して登山道に出たそうだ。昨晩は『芝沢出合』のテン場に泊まったとのこと。するとあの５人組はどこに泊まったのだろう？

ジャンボタクシーに乗り込むと山道の適度な揺れにいつしかウトウトとなり、気づいたらもう切明温泉。駐車スペースには車が６台停まっていた。やはり人気の魚野川。今夜も熾烈なテン場競争が繰り広げられるのだろうか。

それにしても今回、雨予報の中の強行軍であったが、結果的に降られたのは初日のつづら折りと無人小屋に着いてからであり、実質的な影響を受けることなく過ごすことができた。これもひとえに強烈な強運の持ち主のおかげかもしれない。

今晩は日本三大薬湯の一つ“松之山温泉”に泊まって打ち上げをすることにした。ＧｏＴｏ松之山温泉！小指に重みはあるけれど、今日はぜひとも飲ませてもらいます。

それにしても良かったなぁ、魚野川。さまざまな表情の景色があって、広大で、美しいイワナが居て。ぜひまたあの美しい魚体を竿先に存分に捉えに来てみたいものだと思う。

（Ｈ口 記）